

2018年度日本霊長類学会高島賞選考結果報告

本年度の高島賞への5名の応募を受け、2018年5月21日に、名古屋会議室・新名古屋高架新幹線口店にて、高島賞選考委員会を開催した。選考委員6名が出席し、中川尚史庶務担当理事の陪席のもと、応募者の対象となる業績を、学会の規定、従来の基準等に照らし合わせて審議した。対象者は全員、優れた業績を上げており、審議は長時間に及んだ。活発かつ慎重な議論の末、勝野吏子氏と山梨裕美氏を受賞者として推薦するとの結論に至り、これを理事会に答申することとした。

山梨氏の推薦理由は以下のとおりである。

【山梨裕美氏の推薦理由】

対象著作

1. Yamanashi Y, Teramoto, M, Morimura N, Hirata S, Suzuki J, Hayashi M, Kinoshita K, Inoue-Murayama M, Idani G. (2016) Analysis of hair cortisol levels in captive chimpanzees: effect of various methods on cortisol stability and variability. **MethodsX** 3: 110-117. doi: 10.1016/j.mex.2016.01.004
2. Yamanashi Y, Teramoto M, Morimura N, Hirata S, Inoue-Murayama M, Idani G. (2016) Effects of relocation and individual and environmental factors on the long-term stress levels in captive chimpanzees (*Pan troglodytes*): monitoring hair cortisol and behaviors. **PLoS ONE** 11: e0160029. doi: 10.1371/journal.pone.0160029
3. Yamanashi Y, Nogami E, Teramoto M, Morimura N, Hirata S. (2018) Adult-adult social play in captive chimpanzees: is it indicative of positive animal welfare? **Applied Animal Behaviour Science**. 199: 75-83. doi: 10.1016/j.applanim.2017.10.006
4. Yamanashi Y, Teramoto M, Nogami E, Morimura N, Hirata S. (2018) Social relationship and hair cortisol level in captive male chimpanzees (*Pan troglodytes*). **Primates** 59: 145-192. doi: 10.1007/s10329-017-0641-8
5. Yamanashi Y, Matsunaga M, Shimada K, Kado R, Tanaka M. (2016) Introducing tool-based feeders to zoo-housed chimpanzees as a cognitive challenge: spontaneous acquisition of new types of tool use and effects on behaviours and use of space. **Journal of Zoo and Aquarium Research** 4: 1-9. doi: <https://doi.org/10.19227/jzar.v4i3.235>

山梨氏は、動物福祉の研究を積極的に展開している。対象となった論文5件は、飼育下チンパンジーを対象として、長期的ストレスに関する諸問題を扱ったものである。

論文1では、長期的ストレスを効率的に評価する手法が確立していないという現状に鑑み、これを実現することを目指した。体毛中コルチゾルの濃度を指標とすることを考え、これを測定して評価した。その結果として、この指標での長期的ストレスの評価が、可能となった。

論文2は、論文1の結果を適用しての、ストレスに与える要因の調査である。新しい環境に移動した後、時間の経過とともにコルチゾル値は減少する傾向にあり、減少の様相には社会的順位が影響することを示した。また、攻撃を受ける頻度とコルチゾル濃度は、オスでは正の相関があるのに対し、メスでは有意な相関は見られないという結果も得た。多数の個体を用いて長期間の測定を行った研究であり、結果の信頼性は高い。

論文3では、ストレスの評価には攻撃交渉に加えて親和的社会行動も調べる必要があることから、親和的社会行動を扱った。種々のチンパンジーの社会行動の中で、どのような行動が親和的な関係を示す

のかいう問題設定である。ここでは、相互グルーミングと社会的遊びに注目した。社会的遊びは必ずしも親和的な関係を示すわけではないことが、結果の主要部である。

論文4では、親和的社会関係が長期的なストレス反応とどのように関わるのかを調べた。攻撃を受ける頻度と体毛中コルチゾル濃度には正の相関があること、また、グルーミングを行う時間が長い一方でグルーミングを返してもらったことが少ない個体ではコルチゾル濃度が高いことを、明らかにした。

論文5は、動物園のチンパンジーを対象とした認知エンリッチメントがテーマである。野生チンパンジーの行動をもとに新たなフィーダーを考案し、行動学的側面からその効果を評価した。チンパンジーは新しい道具使用行動を習得し、異常行動が減少したことから、効果はあったと判断した。

以上のように山梨氏は、飼育下チンパンジーの福祉的観点に立脚し、新しい視点を持ち込み、また新しい手法を用いて、独自の研究を行っている。動物福祉を科学的に進めることに、大きな貢献となった。加えて、2年間で5件の論文を、査読のある学術誌で公表しており、成果の公表を積極的に行うという点も、高く評価される。

高島賞選考委員会
委員長